

研究ノート

博物館の教育学習活動と展示との関係

布谷知夫

〒 514-0061 三重県津市一身田上津部田 3060 三重県総合博物館

キーワード：知識，展示，コミュニケーション，利用者

Tomoo Nunotani.* 2015. The Relationship between Museum Exhibits and Education Initiatives. Mie Prefectural Museum Research Bulletin, 1: 1-7.

Abstract By the argument of the past museology, the purpose of the museum exhibition was education. Therefore it has been thought that the functions of the museum are specimens maintenance, education and research. However, considering from the change of the way of argument for the recent exhibition, it was better to think that an exhibition and education are functions with another purpose. So, I verified the purpose of the exhibition and education each and clarified each characteristic and the difference.

*Corresponding author: Mie Prefectural Museum, 3060 Isshinden-kouzubeta, Tsu, Mie 514-0061, Japan

1 はじめに

近年は博物館で行われる教育学習活動についての議論が盛んに行われるようになっており、研究発表やシンポジウムなどの催しも頻繁に行なわれるようになった（国立民族学博物館民族学研究開発センター，2003；東京国立博物館，2006；京都大学総合博物館，2006；九州国立博物館・福岡県立アジア文化交流センター，2006；全国美術館会議，1997など）。また教育学習に関する研究も、博物館の学習に特化した理論的な研究（松岡，2006）、博物館が学校の枠組みの中で行う教育（金山ほか，2000；高田ほか，2004）、展示室での展示効果を意識した来館者調査の研究（琵琶湖博物館・滋賀県博物館ネットワーク協議会，2000；布谷知夫・芦谷美奈子，2000；井上，2006；並木ほか，2005；安達ほか，2006；江水・大原，2006）など多岐にわたっている。

特に最近では各地で博物館教育のシンポジウムなどが数多く実施され、学芸員資格所得のための科目に博物館教育論が追加され、博物館教育の教科書ともいえ

る出版物（小笠原ほか，2012；寺島ほか，2012）や理論書（ジョージ・ハイン，2010）も出版されている。

かつての博物館学の議論では、教育学習活動については多数の実践報告はあったが、その位置づけなどについてはあまり議論がされてこなかった（守井，1996）。それに対して最近の議論では、教育学習による効果に焦点をあてながら多様に議論が行われている。しかし最近の研究でも、教育学習活動は博物館の全体的な事業あるいは他の事業との関わりの中では論じられていない。

ここで特に課題としてあげたいのは、博物館の教育学習活動と展示との関係である。これまでの議論では、展示の目的は教育であり、教育と展示とは一体の活動であるとされており、それ以上の踏み込んだ議論はされていない。しかし、近年の展示および教育学習の個別の議論からは、展示と博物館の教育学習とは別の活動と考えたほうが良いと思われる。展示事業と教育事業の関係をどう考えるのか、という議論は、それぞれの事業について考える上では大切な内容であり、

十分な検討が必要であろう。そこで、本稿では展示の目的や博物館で行われる教育学習活動のあり方などを確認することで、博物館の展示と教育学習活動との関係を整理して、今後の議論の材料としたい。

なお、本稿では、もともとの用語として使用されていた引用や議論の紹介にあたる場合については使われていた「普及教育」「教育」などを使い、一般的な議論では「教育学習」の用語を用いる。

2 展示と教育学習活動の関係についてのこれまでの議論

博物館法第二条「定義」の中では、「展示して教育的配慮の下に一般公衆の利用に供し、その教養、調査研究、レクリエーション等に資するために必要な事業を行い」とある。引用した部分の前で記述される資料整備事業、後ろの調査研究事業とあわせて、この引用した部分を教育事業としてひとつの事業とする考えがこれまで一般的であった。つまり、展示の目的は教育であり、その他の教育事業も行っている、という解釈である。そういう理由によって、研究者によって多少の表現の違いはあるものの、博物館が行う事業は、資料整備、教育（場合によっては展示・教育）、調査研究の三つとされてきた。

博物館法制定当時の博物館学の議論では、棚橋源太郎（1950, 1953）や鶴田総一郎（1956）は展示と教育をひとつの事業として捉えている。棚橋（1950）は博物館の教育的効果を非常に重視して「一般公開の各種博物館に共通な事業は、教育と学芸研究の二つである」としている。そして教育活動の中に展覧会をおき、博物館らしい教育とは博物館の資料や展示と関係して行なうことが有効適切であるとした。また鶴田（1956）は、博物館の事業を「収集」「整理保管」「研究」「教育普及」として、この四つが相互に等価値で、補償的であるとしながらも、「収集」「整理保管」「研究」は「教育普及」のための手段として、展示は教育普及を達成するための方法の一つとしている。この議論はその後も長く主流の議論である。

博物館学の見直しの議論が盛んに行われた1970年代には、倉田公裕（1979）は博物館の事業として「研究」「収集、保存」「教育」をあげ、博物館で行うのものはものを見せて行なう教育であり、展示がその最も主要な教育であるという議論を行っている。加藤有次

（1977）は、「資料の収集、資料の整理保管、資料の調査研究、教育活動」の四つを博物館の機能としている。そしてこの四つの機能は同じ働きかけがなければならず、展示は教育活動の室内機能の一部という位置づけとなっている。

森田恒之（1978）は博物館の機能を「学校教育以外で組織的な教育活動を行なうために、資料を収集・保管・展示し、資料の調査研究、その他の必要な事業を行うことを目的に設置される」としている。ここでは「その他の事業を行う」ことを博物館の目的としてみれば、資料収集・保管、展示、調査研究などが行われている、という位置づけであるが「その他に事業」を行うことの目的が明記されていないために、事業の分類においては、棚橋（1950, 1953）や鶴田（1956）と同様である。

伊藤寿朗（1993）は、ユネスコ、国際博物館会議（ICOM）、そして日本の博物館法などの博物館の定義から、博物館の共通した機能は、①物を調査し研究する機能、②物を収集し保管する機能、③物を公開し教育する機能、をあげ、この全てを目的とするのが博物館としている。

いずれの議論も展示と教育は一体であり、展示は教育の手段という位置づけである。そしてその後も最近に至るまで、この基本的な展示と教育の位置づけに対しての議論はほとんど行われていない。博物館学その後の主な教科書など（加藤, 1996；倉田・矢島, 1997；網干善教・編, 1998；鈴木眞理・編, 1999；石森, 1999）においても、博物館の事業（機能）は、基本は「資料整備（収集と保管）」、「教育普及」、「調査研究」の三つという理解であり、教育普及の中に展示が含まれるという認識が続いている。

なお、青木豊（2012）は、博物館の機能を基本・展開・応用と分けて、基本は資料収集・保管（存）・研究、展開は展示と教育活動、応用は利用者が知的欲求の充足のために行う調査・研究への取り組み支援であるとしている。そしてその後の機能の解説では収集・保管（存）・研究・展示・教育の五つの項目に区分して事業内容の説明があり、「博物館の展示は博物館教育の最大の具体である」としている。青木の視点は新たな整理であるが、その個別の記述での教育と展示の関係は従来の議論とあまり変わらないようである。

しかしながら、これらのどの文献においても、基本

的な機能についての総論的議論の後の各論に当たる部分では、「展示」と「教育」とは別の項目として扱われている。それは展示には独自の技術や手法があり、同じく教育普及の事業についても、その内容、手法、理論などは展示とは異なる点が多いためである。

伊藤（1986）は、日本の博物館の発展形態として、「要求に応える」から「要求を育む」という方向に発展しているとし、「要求を育むということに対し、展示という固定した対応の仕方では限界があるという指摘である。この意味で、教育事業の持つ役割が、飛躍的に増して来る。」として、展示と教育学習との意味合いの違いを示唆している。

3 展示をめぐる博物館と来館者との関係

展示と教育学習との相互の関係を明らかにするために、改めて展示の目的について考えてみたい。展示の目的は何かという議論を、博物館からの働きかけという視点から見ると、典型的には二つの考え方があある。そのひとつは、展示は知識を伝える場という伝統的な考え方であり、もうひとつは展示を通して自分自身について考えるきっかけを作る場、という考えである。現実には有名な1点物や非常に珍しい物を目玉とした展示会は多いが、それらは展示資料の種類によって展示の目的のどちらをも含む場合があり、また展示の目的とは異なる範疇の課題が含まれるため、これについてはここでは議論の対象とはしない。

展示とは知識を伝える場、という考え方は、一般的あるいは伝統的な展示のあり方であり、博物館が持つ資料を並べ、解説パネルを使って、特定のテーマにそって博物館が考えている内容を伝えようとするものである。例えば自然史系の展示で、ある地域の昆虫相や植物相などが展示され、個々の和名や特徴などや、日本の中および世界の中での分布の特徴などの解説されている、というような例、あるいは歴史展示の中で、ある遺跡から出土した土器や木器などが展示され、その様式などによって、どの時代、他の地域との関連などが解説される例などは、学芸員の研究成果と知識に基づいて、展示を見る人に展示物に関して、あるいは関連した内容について知識を伝えようとするものである。しかし直接的に知識を伝えようとする展示は、現代のテレビ・雑誌・インターネットなどの情報過多状態の中では、実物による感動という言い方はさ

れているものの、知識を伝える場としては成立し辛くなってきている。すくなくとも詳細についてはもちろん知らないとしても、初めてその知識に接するというような事例は少なくなってきている。多くの場合にはもちろん知識を伝えるということであるが、その知識や背景を再確認する展示という側面が大きくなってきている。

また知識と関わって、博物館としてのメッセージを伝えることを重く見る展示がある。本来、展示とはメッセージを伝える手段として考えられてきたが、実際には展示を見る来館者は、その博物館が期待するメッセージが伝わっているとは言えないことが多い（橋本、1998）。むしろ学芸員のメッセージは、一般的にはなく、おそらくその内容に詳しい少数者にしか伝わらないのかもしれない。

またすでに評価が定まった知識を伝えるだけではなく、まだ評価の定まらない知識、あるいはいくつかの解釈があることを、そのまま伝えるというような展示も、広くは知識を伝える展示ということができるだろう。例えば遺跡発掘の成果から、遺跡の復元のために、古環境やその遺跡の復元がされるが、発掘が進むにつれて、新しい情報が増え、過去の復元の姿ではなく、新たな復元を考える必要が生じて、その過程の展示などは、観覧者が考えながら遺跡その物やその手法などを含んだ知識や情報を得る展示といえる。

それに対して新しい世界観の在り方を考える展示は、展示される物の組み合わせや、その展示への参加によって、自然や暮らしに関する個人の考え方に対して疑問を投げかけ、考えさせるような展示が行われている。この場合には特定の伝えるべき結論が決まっているのではなく、展示を見る人の知識や個人の経験にかかわって、その人が考えるための材料を展示で表現するという事であり、博物館からのメッセージは、テーマ性を強く持ったものとなる。例えば展示室で見られる民家の再現展示は、展示を見て、移築民家の当時の暮らしについて知ってもらうのが目的ではなく、各自が現在の自分の暮らしの在り方、例えば水利用について考えてみることを目的としている場合がある。これは暮らしについての知識の展示としても通用するものでもあるが、周辺の展示などとの効果によって知識を伝えるだけではなく、各個人の水利用の経験などについて考えることが確かめられている（滋賀県博物

館ネットワーク協議会，2000）。あるいは各地の自然史系博物館の里山のジオラマは、景観を伝える展示として作られている場合もあるが、博物館の意図によれば、典型的な自然管理と保全の例として、今後の自然と人間とのかかわり方について考える展示となっている例もある。これらの展示の考え方では、結論がないというよりは、社会規範としての結論はあり、博物館からの提起に対して観覧者が改めて考える機会を作る展示といえるかもしれない。

このような見る側に主体があるという展示の見方は、美術館においてはより顕著に現れるかもしれない。美術館で展示されている作品は、作者名や時代、あるいは作者の感情などの特定の知識を伝えるのではなく、見る側が感じ、考えるものであろう。対話型鑑賞法の実践で知られるアメリア・アレナス（1998）は、「作品の中に意味が存在するというのではなく、それよりも意味は、人々が作品を見るという行為を通じて作品とおこなうコミュニケーションによって、作品に付加されるもの」であるという。作品を見る人は、こうして作品に付加されたものを、自分個人の作品鑑賞として、感じるのである。

博物館の展示室は、より来館者の側に主体があり、受動的な来館者から能動的な、双方向の来館者にと変わり、物を介したコミュニケーションが成立する場、もしくは物の意味が生み出される場（橋本，1998；フーパー・グリーンヒル，1993）へと変わってきているとされている。

さらに新たな博物館の意味合いとしては、楽しみの場という比重が高くなってきている。知的楽しみということも含めて、家族や知人と一緒に時間を博物館で過ごす、という楽しみ方は、今では動物園・水族館などだけではなく、一般の博物館・美術館の過ごし方にもなっている。そして、そういう親しい人との会話を通じた博物館という場での体験によって、人は学ぶのだと言われる（ジョン・H／フォーク，1996）。ここで起こる学びは、知識の吸収ではなく、コミュニケーションや知的経験による社会規範を身に着けることであろう。

展示の目的は教育であるので、博物館の目的は教育に絞られる、という考え方が続いている。しかし博物館学の議論の初期には、博物館教育は展示を使った事業のみをさしていたためにそのような考え方が

あったが、展示の目的は知識を教えることだけではなくっており、展示の考え方が非常に幅広くなっていることを確認したい。

4 博物館の教育学習活動

日本博物館協会の博物館白書（1999）では、従来から行われてきた教育普及活動を講演会・シンポジウム、講座、講習会・工作教室、映画会、自然観察会・見学会、その他という六つの範疇に分けて、それぞれの事業を行っている館園の数を示している。この区分を見ると、博物館の行っている教育普及活動は、博物館からの知識提供や技術の提供が大部分である。もちろん講演会、見学会などを行いながら、聴衆が考える余地は残されているとは言うものの、基本は知識を伝えることであった。

日本博物館協会の範疇には入っていない学習活動として、最近行われることが多いワークショップと呼ばれる活動がある。本来の市民活動の中で定義されているワークショップ（中野，2001）よりは幅広い意味で行われており、ファシリテーターの指示にしたがって一緒に活動を行うことで、その過程や結果について考え、学ぶような活動である。ワークショップの場合には、行われているのは博物館からの知識の伝達ではなく、スタッフからの方向性に従って、まったく自由に活動を行い、多くの場合には結論は決まっていない。最近行われている展示室での「指示カード」などを使った展示見学も（琵琶湖博物館，2000；鈴木，2006；井島，2006；鈴木ほか，2007）同じような要素を持っている。人がつく場合もあるが、展示室のいくつかのコーナーを、順に質問や指示に従いながら展示を確認し、また自分で課題を作りながら、展示室を回っていく活動で、展示を見てパネルを読んで確認するだけではなく、その展示にかかわって、来館者の年齢や知識レベルに応じた展示の見方ができるような工夫がされている場合が多い。このような展示見学は、展示制作者の意図をうまく伝えるというよりも、展示を使いながら、指示カードのプログラムの設問について考える、あるいはそのテーマについての体験をしてもらう、というような方法をとることが多く、単なる展示見学ではなく、展示室という場を使いながら、博物館が準備する教育学習活動の事業であると位置づけることができる。

一方、博物館での学習活動では、研究会や同好会のような自主的なグループがあり、これらの活動も博物館にとっての学習活動の中に入れる場合もあるが、この活動は、博物館や学芸員が知識を伝えるのではなく、学芸員が中心にいるとはいえ、みんながあるテーマで新しい知見を求めて活動する。学芸員の知識が核となり、学芸員からまず学ぶことにはなるが、全体としての目的はそうではなく、みんなで一緒に特定のテーマに沿って資料を集め、みんなで調査、研究を行い、成果をあげることが目的である。このようなグループは参加者全員が自主的に考え、学ぶ場である。

ボランティア活動ではどうであろうか。ボランティアという他の分野では「社会奉仕」というような意味が強い一般的な名称を使ってしまったために混乱が見られるが、博物館では、自主的な活動をする自主グループ（布谷，1999）と、博物館の事業の補助をするボランティア（日本博物館協会，1993）とが見られる。自主的な活動をするグループ（例えば琵琶湖博物館の「はしかけ」、人と自然の博物館の「人と自然の会」など）の場合には、研究会や同好会など、いろいろなテーマで活動する自主的な活動グループと同じである。一方で補助的な活動をするボランティアは、展示解説などの活動をするために研修を受けたり、学芸員からの指導を受けることでそのボランティア活動が成り立っており、そのボランティア活動の内容はどのようなものであっても、補助活動をしながらも博物館の事業に関係を持つことで、基本は自分たちが楽しむ、そして学ぶということである。

これらの例を見ると、博物館での教育学習活動では、学芸員が行う博物館の主催事業としては、知識を伝える事業が大半であるのに対して、来館者が考え、主体的に学ぶような形式の事業は、ワークショップ形式やグループ活動としてのボランティア、同好会・研究会などがあり、この両者の要素を併せ持つような事業はあまり行われていない。最近では子どものうちから博物館や美術館の利用者、ファンを作ることを目的にして、博物館のスタッフが行う事業でも、展示や知識の伝達とは関係なく、博物館という場を感じてもらうことを目的とした事業も行われるようになっていく。

従来に教育学習事業として行われる事業は、博物館白書（日本博物館協会，1999）の掲載例のように、主

として専門の研究者である学芸員が対応して基本的な知識を伝える事によって成立する場合が多く、また博物館の事業に参加してくる参加者も、そういう学芸員の知識に期待してくる人が多かったと思われる。

それに対して、近年に行われている教育学習事業は、従来のように博物館をはっきりした目的を持って利用する来館者ではなく、具体的な利用目的を持たずに博物館に来る人を対象とし、博物館を使うことの楽しさや利用の仕方を知ってもらうことを目的とした事業内容があり、博物館としては比較的最近になって始まった利用方法といえる。そしてその対象者は、地域住民の大多数であり、博物館にとっては、現在一番大切な潜在的利用者である。そしてそういう博物館利用者の中から、従来のような博物館事業やグループ活動や研究会などの活動に参加する人も生まれてくる。

そしてこのような事例においても、教育学習活動というよりは、どちらかというとも博物館という「場」ができた事によって行われる活動であり、展示室を離れて行われていることが大半である。博物館で行われている教育学習の事業は、知識を伝えることが目的になっている事業もあるが、より一人一人の住民に対して、知的好奇心を刺激し、市民としての個の確立を目指すことが目的となってきたと思われる。

5 結論・展示と教育学習活動との関係

本稿の文頭では、これまで一体と考えられてきた「展示」と「教育学習」という博物館事業について、博物館の機能としては別の事業としたほうがいいのではないかという考えを述べた。そして、展示と教育学習の活動を来館者は、それぞれどのように活用しているかという視点を持ちながら、いくつかのケースについて検討を加えた。

展示の目的のひとつが教育にあるという考え方そのものをまったく否定することはできない。しかし博物館法を作る際の初期の博物館学の議論の内容と現在の事業の現状とはかなり異なっている。明治期の博物館では、もともとは陳列することが教育であり、展示以外の教育ということは考えていなかった。後に講演やスライド会などが加わったが、それらは博物館からの知識の提供が目的であり、そのような博物館教育に対する考え方は、博物館法が制定されたのちもしばらくは続いていた。棚橋（1956）は展示が主と考え、博物

館の教育は展示を使ったものとして、展示と資料とを使ったことで成立する教育を博物館教育と考えていた。この考え方は長く影響を持ち続けた。

現在の博物館教育は、講演会などもあるが、その目的は大きな方向としては知識を伝えるという部分はかなり少なくなり、博物館からの機会の提供によって、個人の思考や体験を通して自分たちについて、地域について考えるきっかけを作るといように変化している。博物館からは、学芸員と利用者個人の、そしてそれに加えて利用者同士のコミュニケーションを大事にしている点や、もともと棚橋（1956）のように博物館の展示を使った総合的な教育という考えに対して、現在では背景に博物館が蓄積している情報を持ちながら、展示とは離れた場で、対個人に対する教育学習活動が、あるいは集団の場合でも参加者個人が意識できるような事業展開が普通になっている。それにつれて、博物館の教育学習活動はより幅広くなり、博物館の展示室から離れた教育学習活動のほうに重きがあると思われる。むしろ展示室における博物館教育というものは、現在では少なくなっているだろう。また展示自体も教育を目的にしているというよりも、展示と観覧者とのより双方向性が増し、個人の知識や個人の経験に対する気付きや発見の場となってきている。

展示と教育学習活動とは全く切り離すことができる活動ではないが、近年になって議論されている内容や理論化などでは、その方法論や目的、手段、技術などのどれをとっても、かなり異なる事業として認識すべきであると考えられる。そしてすでに現実には、博物館現場でも博物館学に関する出版物でも、それらの事業解説については別事業として取り扱われている。博物館法第2条の定義にある「展示して教育的配慮の下に一般公衆の利用に供し、その教養、調査研究、レクリエーション等に資するために必要な事業を行い」のうちの、「展示して」から「利用に供し」までが展示を示し、次のコマから後の「その教養」から「事業を行ない」までを教育学習事業と解釈して、展示と教育学習とを別の事業体系と考えるのが自然ではないか。

1950年代から始まった博物館学の議論に比較し、展示事業の目的や性格も変わり、また教育学習事業の目的や手法なども大きく変わってきている。その両事業の目的や性格は現代の博物館運営に対応するように変

化しており、新しい博物館学の議論が進められている。

展示と教育学習とはその具体的な目的や内容はかなり異なることであることと、またその運営の方法については独自に考える内容が多いこと、そして来館者の期待の内容に差があることなどから、博物館での事業としては展示と教育学習とは別の事業とするほうがよいのではないかとする考え方を述べた。今後この点についての議論を進めることが必要と考える。

引用文献

- 網干善教・編. 1998. 博物館学概説. 関西大学出版部, 大阪. 338pp.
- 青木豊. 2012. 博物館論. 博物館学 I (大堀哲・水嶋英治・編著). 学文社, 東京. 17-39.
- 安達文夫・竹内有理・小島道弘・久溜浩浩. 2006. 展示の理解の評価に関する検討. 国立歴史民俗博物館研究報告, 国立歴史民俗博物館. 130: 1-20pp.
- アメリカ・アレナス (福のり子・訳). 1998. なぜ、これがアートなの?. 淡交社, 京都. 195pp
- 琵琶湖博物館 (編). 2000. 漁師修行の旅報告書. 琵琶湖博物館, 80pp.
- 琵琶湖博物館・滋賀県博物館ネットワーク協議会・編. 2000. 博物館を評価する視点. 琵琶湖博物館研究調査報告, 琵琶湖博物館, 27: 209pp.
- 江水是仁・大原一興. 2006. 屋外展示民家における興味が異なる来園者の観覧行動に関する研究. 博物館学雑誌, 32 (1) : 13-43.
- ジョージ・ハイン (鷹野光行・監訳). 2010. 博物館で学ぶ, 同成社, 東京. 287pp.
- 橋本裕之. 1998. 物質文化の劇場 博物館におけるインタラクティブミスマスコミュニケーション. 民族学研究, 62 (4) : 537-562.
- 井上由佳. 2006. 歴史博物館における子どもの学びの評価: 事前・事後調査を中心に. 博物館学雑誌, 31 (2) : 75-100.
- 井島真知. 2006. なぜコミュニケーション? どんなコミュニケーション? ダイノソアファクトリーでの事例から. (布谷知夫・編) 展示室におけるコミュニケーションー展示と人・人と人, 琵琶湖博物館調査研究報告, 24: 17-27.
- 石森秀三. 1999. 博物館概論ーミュージアムの多様な

- 世界．放送大学教育振興会，234pp.
- 伊藤寿朗．1986．地域博物館論—現代博物館の課題と展望—．現代社会教育の課題と展望，赤石書店，東京．233-296 pp.
- 伊藤寿朗．1993．市民のための博物館．吉川弘文館，東京．190pp.
- ジョン・H・フォーク・リン・ディアーキング（高橋純一・訳）．1996．博物館体験．雄山閣出版，215pp.
- 金山喜昭・平岡健・長島雄一・古澤立巳・廣瀬隆人．2000．学ぶ心を育てる博物館—総合的な学習の時間への最新実践例．ミュゼ，東京．126pp.
- 加藤有次．1977．博物館学序論．雄山閣，東京．263pp.
- 加藤有次．1996．博物館学総論．雄山閣，東京．378pp.
- 国立民族学博物館民族学研究開発センター（編）．2003．自由な学びを支援するには．英米の博物館事情に探る—講演記録・論文集，国立民族学博物館，34pp.
- 京都大学総合博物館（編）．2006．博物館で学びが起るとき．21世紀社会教育活性化京都委員会，172pp.
- 九州国立博物館・福岡県立アジア文化交流センター（編）．博物館教育の活性化へむけて．九州国立博物館開館1周年記念国際シンポジウム，16pp.
- 倉田公裕．1979．博物館学．東京堂出版，東京．290pp.
- 倉田公裕・矢島國男．1997．新編博物館学．東京堂出版，東京．408pp.
- 松岡葉月．2006．J. デューイと博物館の学びの評価—歴史展示における主体的学びの視点—．博物館学雑誌，32（1）：61-74.
- 守井典子．1996．博物館学における教育概念の変遷—博物館教育論の構築に向けて—．日本社会教育学会紀要，95-104.
- 森田恒之．1978．博物館の機能と技術．博物館概論，學苑社，東京．221-249 pp.
- 中野民夫．2001．ワークショップ—新しい学びと創造の場．岩波新書，新赤版710．岩波書店，東京．223pp.
- 並木美佐子・竹内有理・落合啓二．2005．企画展示「持ち込まれたケモノたち」の展示評価—企画展入場者の展示利用形態と評価問題に関する認識及び意識の変化．千葉県立中央博物館自然誌研究報告，千葉県立中央博物館，8（2）：61-80.
- 日本博物館協会．1993．博物館ボランティア活性化のための調査研究報告書．日本博物館協会，152pp.
- 日本博物館協会．1999．日本の博物館の現状と課題（博物館白書—平成11年度版．日本博物館協会．337pp.
- 布谷知夫．1999．博物館を活動の場とするボランティアの位置づけ．博物館学雑誌，24（2）：19-28.
- 布谷知夫・芦谷美奈子．2000．博物館評価の考え方と事例．博物館学雑誌，26（1）：37-49.
- 小笠原喜康・並木美砂子・矢島國雄（編）．2012．博物館教育論．ぎょうせい，231pp.
- 鈴木真理（編）．1999．博物館概論．博物館学シリーズ・1，樹村房，東京．194pp.
- 鈴木有紀．2006．利用者との「対話」を主とした新しいワークシートの試み．愛媛県美術館研究紀要，愛媛県立美術館，5：21-36.
- 鈴木有紀・田代亜矢子・西田多江・長井健．2007．共に見る、共に学ぶ—利用者との「対話」からはじまる展示プログラム～ワークシートを中心に．愛媛県美術館，179pp.
- 高田浩二．2004．環境保護における水族館の役割を学ぶ教材開発と授業実践．博物館学雑誌，29（2）：27-42.
- 棚橋源太郎．1950．博物館学綱要．理想社，東京．319pp.
- 棚橋源太郎．1953．博物館教育．創元社，東京．244pp.
- 寺島洋子・大高幸（編）．2012．博物館教育論．放送大学教育振興会，276pp.
- 東京国立博物館（編）．2007．世界の現場から今，博物館教育を問う．国立博物館，183pp.
- 鶴田総一郎．1956．博物館学総論．理想社，東京．309pp.
- 全国美術館会議．1997．美術館の教育普及・実践理念とその現状．全国美術館会議教育普及ワーキンググループ活動報告1，98pp.